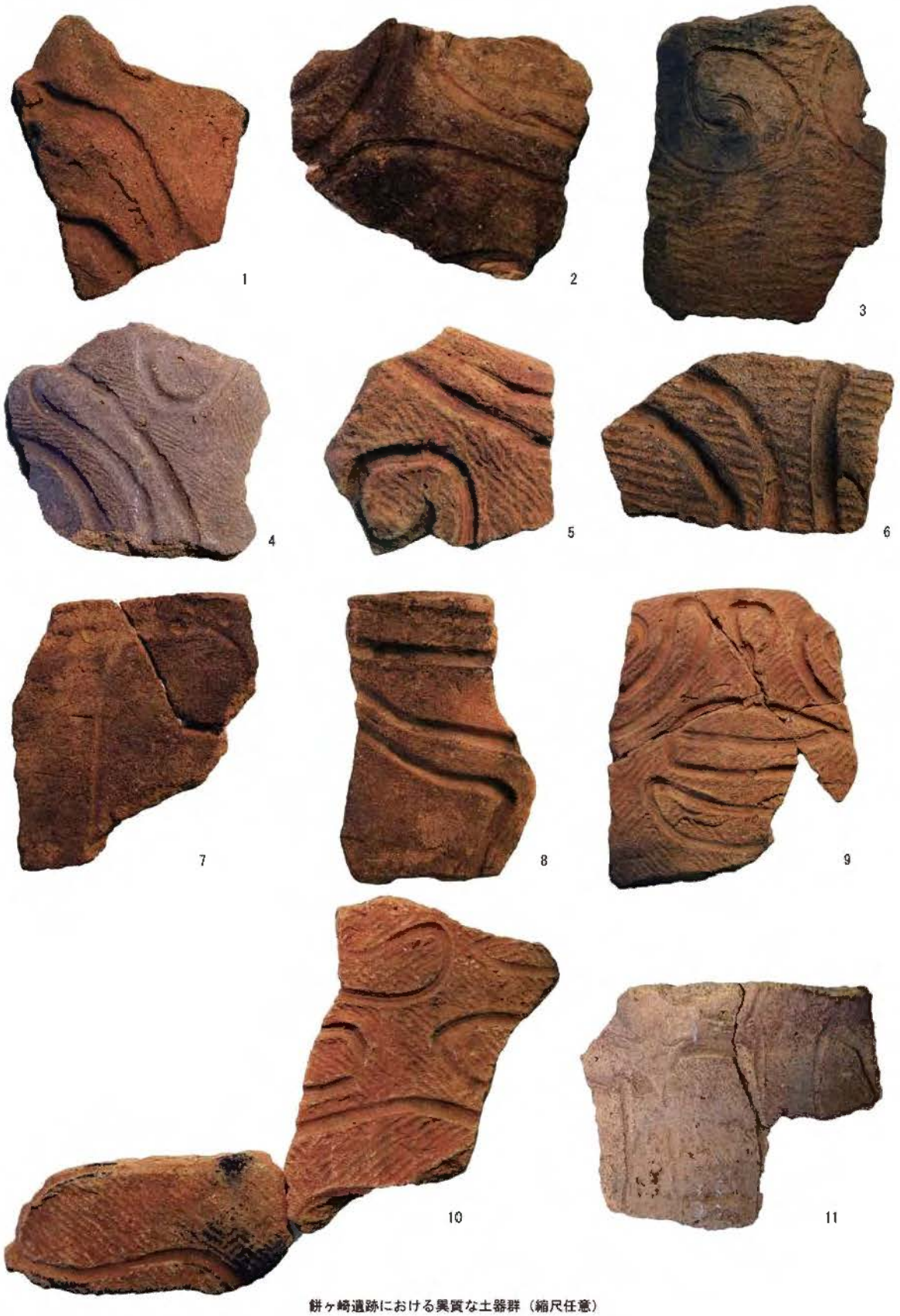


餅ヶ崎遺跡における異質な土器群（縮尺任意）

餅ヶ崎遺跡における異質な土器群（縮尺任意）

【資料紹介】千葉市若葉区餅ヶ崎遺跡における異質な土器群
―近畿地方北白川Ｃ式系土器群の紹介を中心に―

加納　　実（千葉市立加曽利貝塚博物館）

はじめに

餅ヶ崎遺跡は千葉市若葉区源町に所在する。若葉区愛生町に水源を有する葭川に面する標高約 30 ｍの台地上に形成されている。遺跡の立地する台地面積約 140,000 ㎡のうち、約 73,000 ㎡の本調査を実施し、縄文時代中期末から後期初頭にかけての住居跡 85 軒を擁する集落のほぼ全面を調査した。なお、遺跡の詳細は埋蔵文化財発掘調査報告書に委ねたい（㈶千葉市埋蔵文化財調査センター 2019）。

周辺の遺跡としては、愛生遺跡（㈶千葉市文化財調査協会 2000、千葉市教育委員会 2015）・海老遺跡（㈶千葉市文化財調査協会 1996・1997・1999・2000、千葉市遺跡調査会 1986）など、餅ヶ崎遺跡と同じ時間幅の中で形成された集落の存在が目を引く。

１．既報告資料の紹介（巻頭カラー図版１～18　第１図１～18）

ここではタイトルのとおり、餅ヶ崎遺跡から出土し報告がなされた縄文時代中期末から後期初頭の土器群のうち、在地の加曽利Ｅ式系譜の土器群とは趣を異にする異質な土器群について、その重要性に鑑み、再録し併せて巻頭のカラー図版で紹介しておきたい。

本稿での掲載に際しては、報告書での掲載順に新たに１からの通し番号を付し、最初の表記の際に、通し番号の後の括弧内に報告書図番号・遺物番号を併記する。

観察結果等の事実記載については報告書での記載を転載するが、遺物番号の付け替えや、文脈に応じて最低限の加除筆を行っていることを諒とされたい。

なお、各遺構番号の後に報告書中で示された当該遺構の設営時期を報告書表記のまま記しておいた。

住居跡出土

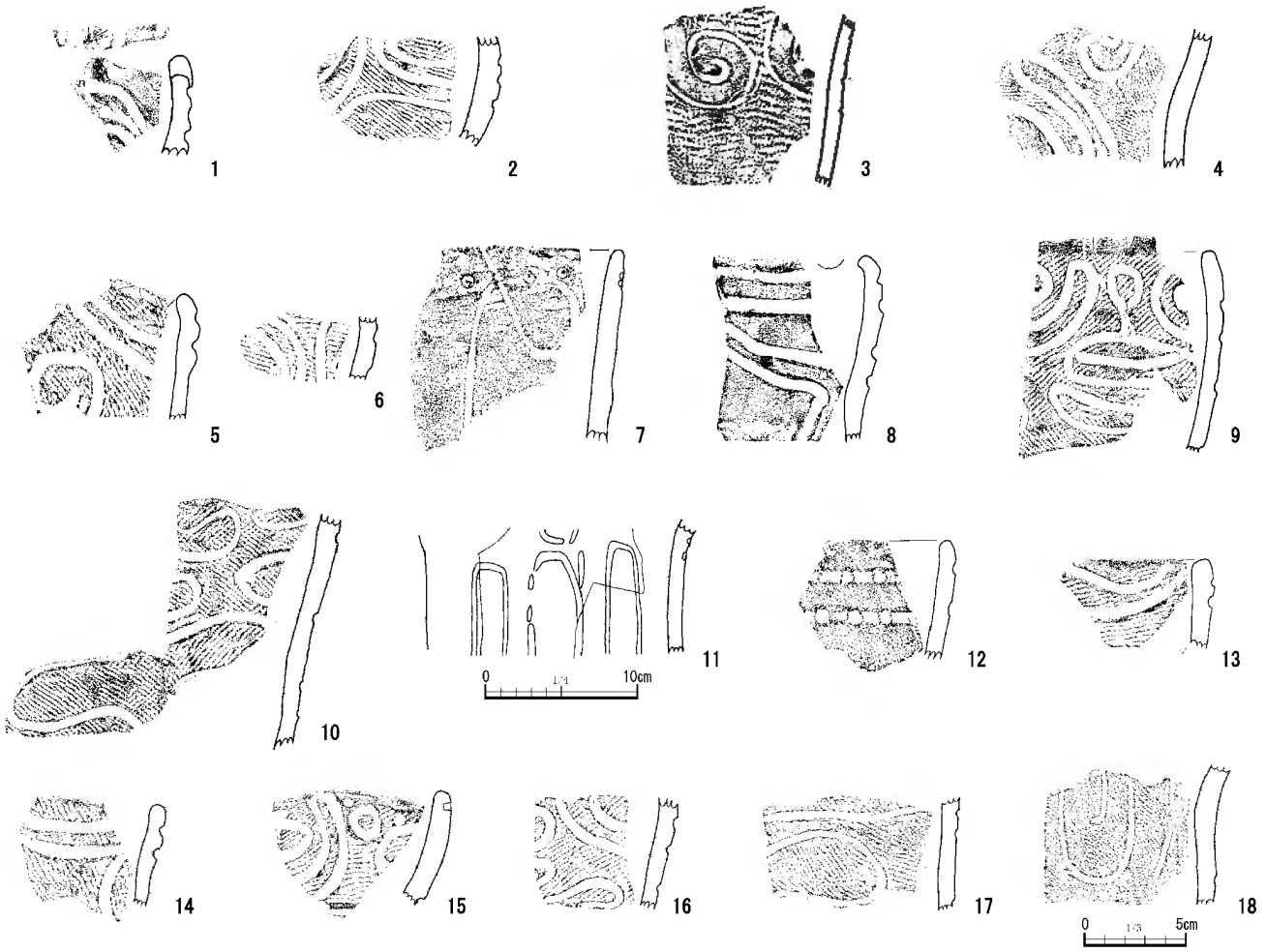
J-6（設営時期　加曽利ＥⅣ）：1（第 58 図 19）・2（第 58 図 21）は称名寺Ⅰ式である。称名寺式第１段階の土器であるが、いずれも沈線による内面突出は認められない。１は口唇部に突起が貼り付けられ、太く深い沈線で文様が構成される。2 は沈線と目の細かい縄文が認められるが、帯縄文の構成が不完全なものである。

J-17（設営時期　加曽利ＥⅣ～Ⅴ）：3（第 82 図 12）は称名寺式第１段階と考えられる。縄文を地文とし沈線で渦巻文が施される。

J-36（設営時期　加曽利ＥⅤ？）:4（第 107 図 36）は称名寺式である。称名寺式第１段階の土器である。帯縄文が徹底されない土器である。

J-46（設営時期　称名寺Ⅰ）：5（第 128 図 20）は称名寺式第１段階の土器である。口縁部に段を持つ。太く深い沈線と縄文で文様が施されるが、帯縄文は不徹底である。沈線による内面突出は認められない。

J-49（設営時期　加曽利ＥⅢ？）：6（第 132 図 21）は称名寺式第１段階の土器である。太く深い沈線と縄文で施される。帯縄文が不徹底である。



第1図　既報告資料

土坑出土

D-194（設営時期　称名寺）:7（第211図1）は薄手で焼成がやや甘い破片である。直に立ち上がる口縁で、口縁下に竹管による円形押捺と、体部の懸垂文が円形押捺付近で相互に連携するように施され、逆U字状の意匠を醸し出す。沈線は浅い。器表面の調整は横位の擦痕のように観察できる。本破片は加曽利E式土器の系譜上に成立するのではなく、東海以西の土器群の系譜上に位置づけることができる。積極的に中期末に位置づける根拠はなく、後期初頭と考えたい。

D-255（設営時期　称名寺）：8（第219図3）は胎土に微砂粒を若干多く含むような印象がある。器面が比較的軟らかい段階で沈線を施す。沈線施文により粘土がはみ出ることはない。調整により消去された可能性はある。器表面の沈線内と内面に煤が残存する。内外面はやや丁寧なナデ調整であろう。口唇は面取りされるがやや丸みは帯びる。後期初頭に属する破片であろう。近畿地方の北白川C式に起源を有し、後期初頭に下る破片である。

D-313（設営時期　称名寺）：9（第299図1）は縄文地に単沈線で意匠を施す。器面の軟らかい段階で粗雑な沈線が施される。沈線の深さは一定ではない。破片中央下半の横位の楕円形意匠内は、縄文がやや磨り消されているような印象がある。口唇面は実測図よりも丸みを帯びる印象がある。10（第299図7）と同一個体の可能性がある。9・10は近畿地方の北白川C式土器に起源を有し、後期初頭に下る破片である。

第２図　追加資料

D-340（設営時期　称名寺）：11（第 232 図 12）は「U 字状文」と「逆 U 字状文」が対向する加曽利 E 式系譜の文様構成に類似するが、縄文は認められない。器面の調整は粗いナデである。

遺構外出土

12（第 273 図 485）は西日本の中期末葉土器群の影響が認められるものである。沈線内に刺突が施される。13 ～ 18（第 273 図 489 ～ 494）は称名寺式である。帯縄文が徹底されていないものである。いずれも称名寺式第 1 段階のものである。内面突出が認められるものはない。

なお 15 については、発掘調査予報（千葉市教育委員会 1980）のなかで既に、報告者である故青沼道史によって「称名寺式土器の範疇で捉えられる土器である」、「加曽利 E 式末葉の要素を多く残す土器である」と報告されている（PL.5　75）。

２．追加資料の紹介（巻頭カラー図版 19 ～ 23　第 2 図 19 ～ 23）

ここで謂う追加資料とは、報告書（㈶千葉市埋蔵文化財調査センター 2019）刊行に向けた一連の作業工程の都合上及び時間的制約から報告書への掲載がかなわなかった破片である。本稿ではこれまでの既掲載資料に続く番号を付し、併せて巻頭のカラー図版で紹介しておきたい。なお、図示番号の括弧内には遺物の注記番号を付しておいた。すべて遺構外（グリッド）出土のものである。

19（ヌ -25C 表土）は焼成がやや堅緻な破片である。他の破片に比して器面のやや硬化した段階で沈線が施される。ナゾリは認められない。縄文施文の有無による図／地効果を有し、弧状の沈線は口唇面に抜けることはない。20（ミ 14(14) カクラン）は器表面の風化がやや進行する破片である。口縁直下の沈線以上から口縁端部まで縄文が施されるが、口唇面には縄文は及ばない。縦方向の平行沈線間に縄文が施されるが、口縁側の部位は縄文が認められないようである。口縁下の横方向の沈線に比して、縦方向の沈線の方が浅く感じる。21（ロ -18- Ⅱ）は 22・23 に比して黒みを帯びる色調である。沈線は棒状工具によるやや粗雑なもので器面が柔らかい段階で施され、沈線脇への粘土のはみだしが若干認められる。沈線のナゾリは認められない。22（ヤ -22 Ⅲ層）は器面の比較的柔らかい段階で、丸先棒状ではない板状に近い工具によりやや粗雑な沈線が施される。沈線脇への粘土のはみだしが若干認められる。縄文の押捺はやや浅い。内面の調整はやや雑なケズリである。23（ヤ -23 表土）は丸先棒状工具によるやや丁寧な沈線が施される。沈線脇への粘土のはみだしが若干認められる。縄文の押捺はやや浅い。内面の調整は比較的丁寧なナデである。

最後に、資料全体を一瞥して、縄文／無文の効果（図／地効果）に乏しく、器面の柔らかい段階での沈線施文、沈線脇への粘土のはみだし、無節縄文等により、同一個体の可能性がある破片が多いようにも観察できる。しかし、施文具の観察（類推）、沈線の深さ、内面の調整等を観察すると、同一個体の破片を断定することが困難な状況にある。現段階では、2・5・6・13 が同一個体である可能性、9・10・15・17・22 が同一である可能性を指摘するにとどめたい。

おわりに

本稿で示した土器群は、冒頭に記したとおり、在地の加曽利 E 式系譜の土器群とは趣を異にする異質な土器群であり、従前の帯縄文によってイメージされる称名寺式土器の範疇にも含み得ないものが主である。事実記載のとおり北白川 C 式土器と捉えられる近畿地方中期末土器群に系譜を有する土器群が主であり、このような土器群について筆者はかつて幾度となく問題提起を重ねてきたところである（註）。
近年、この北白川 C 式土器に系譜を有する良好な資料が国立市緑川東遺跡で発見され（黒尾 2014）、系譜や編年学的位置づけについて研究の俎上に挙がってきた（石井 2015・2016、小澤 2016、黒尾 2014 など）。当該土器群に関する関心が高まっている研究趨勢に鑑み、本稿において資料紹介を行った次第である。

今後、この資料紹介を契機に当該土器群の系譜や編年学的位置づけについて考察を加えていくと共に、冒頭に記したとおり、餅ヶ崎遺跡と同じ時間幅の中で形成された周辺の遺跡である、愛生遺跡・海老遺跡出土土器群と本遺跡出土土器群との相互比較により、中期末から後期初頭の、限定された地域社会における異系統土器群の、貫入・受容の様相の共通性や差異について言及していきたい。

最後に、本稿を草するにあたって、千葉市埋蔵文化財調査センター所長西野雅人氏からは、資料の見学・掲載に際して格段の協力及び配慮があった。また千葉県教育庁教育振興部文化財課小澤政彦氏からは当該期土器群について数多くの有益なご教示を得ることができた。末筆ながら感謝の意としたい。

註

【2003 年の縄文時代学界動向「土器型式編年論　後　期」】（加納 2004）

東日本の研究者が抱える興味のひとつに、瀬戸内から伊勢湾岸の中期末土器群の構成と、当該土器群が全て中津式的な土器に変化するのか否か、という興味がある。古くは中村友博により「馬場川 O 式土器」として、後期に下る非中津式土器的な土器群が認識された経緯もあるが（中村 1980）、その認識は受け継がれることなく、当該土器群の実態は判然としないままであった。そういった観点からは、今回、穂積が「C2a. C4a」として抽出した土器群を「続北白川 C 式」と捉えた点は、意義のある成果であるといえよう（穂積 2003）。

一方、柳浦俊一は、各地域の中期末土器群が、どのように中津式土器に受け継がれていくかという視点から、分析を行っている（柳浦 2003）。山陰における最古相の中津式土器の好例に恵まれない状況のなか、山陰地方の里木Ⅱ・Ⅲ式期の状況や、北白川 C 式土器の流入状況等をはじめ、中期末から後期前半における当該地域の様相を解説しており、大いに参考となる。なお、中津式期以降の様相も睨んだところでの地域性の抽出についても、認識を新たにする点が多い。

【2011 年の縄文時代学界動向「土器型式編年論　中　期」】（加納 2012）

近畿地方において北白川 C 式土器終末期（中期最終末）の全ての類型（泉拓良が捉える各“類”泉 1985）が所謂中津式土器的なものに変化するのか否かという問いがある。全ての類型が中津式土器へと変遷しないのであれば、どの類型が中津式土器に変化し、中津式土器に変遷することのない土器は、中期最終末で消失するのか、顔つきを変えもしくは顔つきを変えることなく後期初頭に下るのかという、中村友博がかつて提起した“馬場川 O 式土器”（中村 1980）の把握にまつわる課題が未だ克服されてはいない現状にある。また、中期最終末のうちいくつかの類型のみが中津式土器に変遷するのであれば、その類型はどの類型であり、その変遷はスム－ズなものであるのか。スムーズでないとするならば、それは中期最終末のいくつかの類型の融合・接触によって説明できるのか否か、想像をたくましくすれば、近畿地方における地域性・地域色の再編成のようななかから中津式土器の成立を語ることができるのか否かという社会論へつながっていくものと思

われる。このような課題からも、私部南 2262 資料Ｂ類は北白川Ｃ類系譜＝東日本系譜の土器ではないものの、中期末系譜の土器が後期に下ることが確実となった資料である（㈶大阪府文化財センター 2011）。

【中期末～後期初頭における東西関係について】（加納 2013）

泉拓良が示した北白川Ｃ式４期の土器群（泉 1985）の全てが、石井の謂う「“後期”磨消縄文土器成立への動き」（石井 1992）を経て、その全てが所謂中津式土器的な有文精製の磨消縄文土器に変遷するか否かという疑問が生じる。例えば、瀬戸内地方においては幸泉満夫が、「瀬戸内地方中期における里木Ⅱ・Ⅲ式からの系譜のもと沈線文土器が成立し、後期縁帯文成立期に至るまで他の文様系統と共伴しつつ存続する」ことを示している（幸泉 2001）。古くは泉拓良が把手状山形口縁を有する土器群について、「近畿地方出土の土器の一部も中津式にまで下る可能性がある」と示唆し（泉 1982）、中村友博は東大阪市馬場川遺跡Ｏ地点出土土器群の時間的傾斜を追うなかで、これらを「馬場川Ｏ式土器」として中期末から後期初頭に位置づけている（中村 1980）。さらにこれらの問題を千葉豊は「中期末的な土器が後期へ残存することはないのか」と問いかけ、各地域での課題を包括している（千葉 2004）。

このように、土器群の系統の分析や編年研究の深化に伴い、称名寺式土器においては、その最古段階の土器群の位置づけの再検討が必要である。同時に、所謂中津式土器的な磨消縄文土器に変化をしない、中期末的な顔つきを有する土器群が後期にまで下る可能性を認めていかなければならない。

【関東東部の中期最終末から後期初頭の土器群】（加納 2016）

近畿地方中期終末と後期初頭の土器群の区分については、泉深鉢Ａ類（泉 1985）において鈴木が見いだした「帯状部意匠描出」「交互充填施紋」「描線不交叉」の原則（鈴木 1990a・1990b・2007）の獲得が目安とされてきた。

この目安を前提にした場合、深鉢Ａ類により示された中期／後期の画期が、深鉢Ｂ類・Ｃ類にも適用できるか否かという問題がある。深鉢Ａ類の全ての系譜が中津式土器的なるものに変化するのか、同様に深鉢Ｂ類・Ｃ類の全ての系譜が中津式土器的なるものに変化するするのかは明らかになってはいない。さらに深鉢各類内に認められる様々な系譜の存在や近畿地方内部での地域性を加味するならば、例えば深鉢Ａ類の特定の系譜が中津式的な土器へ変化し、深鉢Ｂ類・Ｃ類の一部は中津式土器的な磨消縄文土器に変化をするが、深鉢Ａ類・Ｂ類・Ｃ類の一部の系譜については顔つきが変わらないもの、形骸化するもの、粗製土器に転化するものが想定できる。

このように考えると、我々が現段階で個別に中期／後期の峻別を行っている土器群の個別の評価の妥当性にさえ常に疑問がつきまとう可能性がある。

引用・参考文献

青沼道文 2000「餅ヶ崎遺跡」『千葉県の歴史　資料編　考古Ⅰ（旧石器・縄文時代）』千葉県

石井　寛 1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第９冊　（財）横浜市ふるさと歴史財団

石井　寛 2015「稲ヶ原遺跡出土土器群が提起する諸問題」『横浜市歴史博物館　紀要』VOL. 19

石井　寛 2016「関東南西部の称名寺式土器」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館　（公財）横浜市ふるさと歴史財団

泉　拓良 1982「西日本縄文土器再考−近畿地方縄文中期後半を中心に−」『考古学論考　小林行雄博士古希記念論文集』※脱稿は 1976

泉　拓良ほか 1985「土器」「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ－北白川追分町縄文遺跡の調査－』京都大学埋蔵文化財調査センター

小澤政彦 2016「武蔵野・多摩地域周辺の土器系統：称名寺式」『シンポジウム　縄文研究の地平 2016―新地平編年の再構

築―発表要旨』縄文研究の地平グループ　セツルメント研究会
加納　実 2004「2003 年の縄文時代学界動向　土器型式編年論　後　期」『縄文時代』15　縄文時代文化研究会
加納　実 2012「2011 年の縄文時代学界動向　土器型式編年論　中　期」『縄文時代』23　縄文時代文化研究会
加納　実 2013「中期末～後期初頭における東西関係について―土器群の併行関係を巡る諸問題を中心に―」『「完新世の気候変動と縄紋文化の変化」公開シンポジウム予稿集』「関東甲信越における中期／後期変動期」実行委員会
加納　実 2018「2017 年の縄文時代学界動向　土器型式編年論　後　期」『縄文時代』29　縄文時代文化研究会
黒尾和久 2014「Ⅶ．調査成果　1．緑川東遺跡の住居変遷と縄文中期末葉～後期初頭の土器」『東京都国立市　緑川東―第 27 地点―　介護老人保健施設国立あおやぎ苑増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』株式会社ダイサン
幸泉満夫 2001「西日本縄文後期土器組成論-瀬戸内地方における沈線文土器に関する研究-」『考古学研究』第 48 巻第 3 号　考古学研究会
㈶大阪府文化財センター 2011『交野市私部南遺跡Ⅱ　一般国道 1 号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
㈶千葉市文化財調査協会 1988『千葉市餅ヶ崎遺跡―昭和 60 年度発掘調査報告書―』
㈶千葉市文化財調査協会 1996『千葉市海老遺跡―平成 4 年度調査―』
㈶千葉市文化財調査協会 1997『海老遺跡』
㈶千葉市文化財調査協会 1999『―千葉市―榎作遺跡　網田遺跡　宇津志野遺跡群・海老遺跡　荒屋敷貝塚』
㈶千葉市文化財調査協会 2000『千葉市愛生遺跡』
㈶千葉市文化財調査協会 2000『千葉市海老遺跡―平成 8 年度調査報告書―』
㈶千葉市埋蔵文化財調査センター2019『千葉市餅ヶ崎遺跡－千葉市動物公園第Ⅰ期工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
鈴木徳雄 1990 a「称名寺式土器」『調査研究集録』第 7 冊　横浜市埋蔵文化財センター
鈴木徳雄 1990 b「称名寺・堀之内 1 式研究の諸問題」『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
鈴木徳雄 2007「称名寺式土器研究の諸問題―南関東地域の資料を中心に―」『中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
千葉市遺跡調査会 1986『海老遺跡』
千葉市教育委員会 1980『千葉市源町餅ヶ崎遺跡発掘調査予報―1979 年度遺構確認調査概報―』
千葉市教育委員会 2015『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書―平成 26 年度―』
千葉　豊 2004「中津式-研究史と課題-」『第 15 回　中四国縄文研究会　中津式の成立と展開』中四国縄文研究会
中村友博 1980「馬場川 O 式土器の型式学的位置」『歴史手帖』第 78 号　名著出版
穂積昌裕 2003「中津式土器成立期の諸相」『立命館大学考古学論集　Ⅲ -1　家根祥多さん追悼論集』立命館大学考古学論集刊行会
柳浦俊一 2003「山陰中部域における縄文時代後期土器の地域性―とくに「中津式」の小地域性について―」『立命館大学考古学論集　Ⅲ -1　家根祥多さん追悼論集』立命館大学考古学論集刊行会
横田正美 1983「柄鏡形住居址とその遺物について―千葉市源町・餅ヶ崎遺跡―」『貝塚博物館紀要』第 9 号　昭和 58 年度　千葉市加曾利貝塚博物館